

ウノ多ク散タルヲ火箸ニテ四方ノ角ヲツキ、穴ヲアケテ火箸ニテカキナデケルガ、輕浮ノモノ故、クボキ處ニタマリテケルヲ、利休ガ見テ尤ト思ヒホメケルガ、重テテ利休ガ法印ヲヨビケルトキニ、始メヨリ四方ノ角ヲカキケルトナリ、故ニ角ヲカクコトハ金森法印ヨリ始タルト云、〔槐記續編〕享保十六年四月十五日、參候所司代參ラルヨシ承リ、朝ノ内ニ參候シ風爐ヲ拜見ス、見ゴトナルコト申モオロカナリ、ソモ此灰ハ入江様ヨリ被進シ灰ニテ、類稀ナル灰ナリ、少シ拜領ス、例ニハカハリタル灰ノヨウニ見受タルヨシ申上、仰ニ、イカニモコレハ風爐モ大ナリ、カタガタ此灰ノカタニシタリ、コレヲ昔ノ人ハ杉ト云、山ト云、灰ノ仕様ト、杉ト云、灰ノ仕様ト二色アリ、コレヲ杉ト云、上ノ開タル風爐ニハ、コレモ又面白シト仰ラル、

〔喫茶指掌編〕又玄齋八月の末に、今日菴にて風爐の名殘とて、雲龍釜にて茶有し、相伴は豊田長傳、井上宗惠なり、此時雲龍の灰を工夫せしと教示ありし也、

又玄齋五十二歳の時の事にて、生涯の名殘にて有ける、予<sup>○速水</sup>加州下向、餞別かた<sup>ハ</sup>の茶也、其教示の趣は、瓦爐談に著ぬ、何風呂にても、雲龍釜を執合す時は、いつも向一文字に爲<sup>ト</sup>の事也、面しろし、

## 器物扱法

〔茶道織有傳<sup>下</sup>〕茶の手前善惡の大體

それ茶の手前善惡は、その生れつきによる也、扱茶入茶碗、茶玄やく、茶せん、ひ玄やくなどの手つづきは、うでくびのまがらぬやうに、りきみなきやう尤也、或ひちをはり、ちやんくとはづみ、ゆびをはね、りはつに見ゆる事、大に惡しき事也、なるほど目にか、らぬやうに、ちつていにするときは、をのづからまほらしく見ゆるもの也、又ひ玄やくをたかくあぐる事、惡し、扱釜をあげるには、兩ひちをひざへつけ、くわんを右はさきへ、左は前へ、又はづすには、右は前へ、左はさきへはづす也、扱釜をあぐるに、大ゆびと人さしゆびは上に殘、外三ツゆびをくわんの中へ入あぐる也、か